

松山市平和の語り部「杉野富也」さんによる体験談(H27年)より抜粋

戦時中、今の松山空港がある辺りに、海軍の航空基地があった。私は、そこで「彩雲（さいうん）」という航空機に乗っていた。私が話す体験談をこれからの参考にしてもらいたい。

当時は小学校6年で義務教育が終わった。私が中学生になった頃戦争が始まった。毎日兵隊が中国の戦場に送られていくような時代だった。私が海軍航空隊を志望したのは、新聞で海軍の活躍が報じられていたからである。昭和17年4月に海軍航空隊から合格通知が届いた。

17歳であった昭和17年5月に土浦（福岡県）の海軍航空兵へ入隊することになった。同期で入隊したのは約1,450人位だった。全国いろいろな所から来ていた。

昭和20年2月に松山海軍航空隊基地に転勤した。当時、松山の基地には紫電改（しでんかい）という戦闘機と偵察隊が1機あった。偵察機は「彩雲（さいうん）」という名前だった。当時世界最速の飛行機だった。

私の同期のA君は17歳で特攻により亡くなった。A君が特攻に行く時に、「お互いに長生きしよう。死ぬなよ。」と言って手を握り別れた。そのA君は、私と別れてから50日の命だった。昭和20年3月21日に特攻機の最前線の今の鹿児島県にある鹿屋基地から出撃した特攻隊でA君は亡くなった。戦争になると、17歳でも兵隊になる。

昭和20年3月19日、敵の戦闘機と大空中戦が松山上空でおこった。私が隊舎で朝食をとろうとした時に、グラマンによる機銃掃射を受けた。逃げようと思ったが、みんなが大きい靴を履いて逃げたので、私に合う靴がなかった。敵より隊舎へ目がけて機銃掃射を受け、私の体の周りに機銃が抜けていった。後で見に行くと私が通った周りには、無数の弾の跡があった。とにかく防空壕へ逃げた。防空壕の中から飛行場の近くで紫電改とグラマンの空中戦を見た。中島や伊予市の上空だった。実際の空中戦を見たのは初めてだった。偵察機の1機が高知沖で敵の戦闘機を見つけ、連絡してきたので、松山の紫電改が向かった。偵察機1機が四国山脈の上でグラマンに体当たりをして戦死した。今でもその近くに慰霊碑が建っている。

その後、昭和20年5月22日にA君が特攻で亡くなった鹿屋（かのや）基地へ、私が転勤となった。特攻機には、人間爆弾もあり、爆弾に人間が乗っていた。中には、250キロ爆弾を2発積んだ練習機の特攻もあった。練習機はベニヤ板と桜の木でできていた。

同期が特攻で飛び立つ前に、手を握って「頑張れよ。」と声をかけると、「先にいって待っているぜ。」と言われた。今でもその光景を忘れることができない。座席にはマグロのような爆弾を乗せていた。

私は、偵察機に乗っていたため特攻機に乗ることなく終戦を迎えた。

今の飛行場の付近は本当に戦場だった。掩体壕から飛び立ち二度と戻ってくるのでできなかった航空隊員の中には、若い少年も多かった。戦後70年、平和な日本を守っていくのは、今聞いてくれている君たちだ。病気にならないように、できたら元気に走り回れるような趣味を見つけ、人と仲良く関わり合いながら過ごしてほしい。